



ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No. 138 2022.4.21













令和4年度

春季特別展

2022 /28

脇指 銘 [表] 賀州住兼若作 [裏] 慶長拾二年二月日 桃山時代 慶長12年(1607) 個人蔵









大加州刀展

「前期」4/28日 \oplus -5/24日 \oplus imes 「後期」5/27日 \oplus -6/26日 \oplus

混雑時には、15:30 までにチケット購入列にお並びいただいた方のみのご入場となります 新型コロナウイルスの感染状況、混雑状況などに応じて、入場の条件を変更する場合があります 最新の情報は公式 HP、公式 Twitter 等でご確認ください

第章加州

加州刀の黎明 真景・友重

国家的公司等

No.1 短刀 銘 [表] 藤原真景 [裏] 貞治六年二月日 南北朝時代 貞治6年 (1367) リードケミカル株式会社蔵

TO THE SECOND WITH THE WAY TO SECOND THE SEC



加賀国における刀づくりは、現存する刀剣や伝承から、南北朝時代頃に始まったと考えられます。加賀最古の刀工と目される「真景」の初代は、鎌倉~南北朝時代の越中国の刀工・則重の影響を受けていますが、その来歴には不明な点が多く残されています。

また、「藤嶋友童」は越前国藤嶋から移ってきた系統です。初代は山城国の刀工・衆国俊の門人と伝わりますが、作風としては大和物の 影響が強く見られます。「藤嶋友重」からは数々の刀工が派生し活躍しており、加州刀の歴史において非常に重要な刀工です。

第2章 清光の命脈

No.19 刀 銘 [表] 金澤住藤原清光作 江戸時代前期(17世紀中頃) 株式会社ニトロプラス蔵

「清光」は加州刀の歴史において最長の流派で、古刀期から新々刀期まで脈々と続きました。その初代は初代藤嶋友重の弟・行光の門流で、歴代が加賀国の泉に住んだことから「泉鍛冶」とも称されました。もっとも著名なのは貞享4年(1687)に没した長兵衛清光で、6代目とされています。歴代の清光の中でも群を抜く腕前で、困窮の末に加賀藩の貧民救済施設に入り、そこで作刀したという逸話も残ります。また、新々刀期には清次郎清光が「赤下羅久」系の甚之丞兼置と並んで加州刀の双璧として知られました。

第3章 加賀青江 家次

No.28 脇指 銘 [表] 家次 [裏] (金象嵌) 鳥屋入/政重(花押) 室町時代末期(16世紀後半) 本多政重所用 個人蔵

古刀期に活躍した加州鍛冶に、将監家次に始まる橋爪系が挙げられます。その始まりは越前千代鶴の流れを汲む国次で、初代家次の時に能美郡能美村(小松市能美町)橋爪に住んだと伝わります。これにちなみ、この一派の刀剣は橋爪物と呼ばれました。

橋爪系の中心的な刀工である家次は室町時代に活躍し、備中青江の作風に通じることから「加賀青江」とも称されました。家次の名は 新刀期に入っても2代続きますが、作例は少なく、江戸時代前期に途絶えたとみられます。

第4章 加州最大派閥・陀羅尼

1 30 m

No.45 刀 銘 [表] 加州住橘勝家作 江戸時代前期(17世紀後半) 個人蔵

院羅尼系は橋爪系にルーツを持つとされる一派で、古刀期の三郎右衛門勝家を祖とします。その名は、刀剣を鍛える際に尊勝陀羅尼の秘咒を唱え、銘にも「陀羅尼」と切ったことによるとされます。代表的な刀工には、新刀期の初代橋勝国が挙げられます。勝国は当時の加賀で随一と評され、多様な刃文を施した優品を多く残しました。同時期には家思や家草、苦家といった刀工も活躍し、陀羅尼系は新刀期から新々刀期にかけて加州鍛冶の最大派閥をなしました。

前回を超える加州刀約100点が一堂に! 500年以上にわたる加州刀の歴史に迫ります。

加州刀とは、加賀国で打たれた刀のことを指します。その魁として「真景」や「藤嶋友重」が知られ、室町時代には藤嶋系 や橋爪系などの流派が活躍しました。江戸時代に入ると美濃から「兼若」が移り、華やかな刃文で一世を風靡します。同じころ、 加賀藩が刀工を保護したこともあり、加州刀は全盛期を迎えました。

当初、令和3年度夏季特別展として開幕した本展ですが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けわずか9日間で中止となり ました。このたび、再開催を願う多くの声に応え、出品資料をさらに充実させて開催いたします。

> 追11 刀 銘 [表] 加州泉小次郎十一代孫藤江清次郎藤原清光 [裏] 明治二年巳八月吉日應需作之 明治時代初期 明治2年(1869) 個人蔵

加州刀の新風 兼若-

慶長9年(1604) 個人蔵

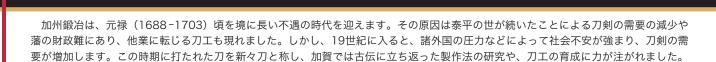


新刀期に入ると、加賀藩前田家は在来の清光らを保護すると同時に、国外からも刀工を呼び寄せ、城下に鍛冶町を設置するなど、加州 刀は非常に恵まれた時代を迎えます。この頃活躍したのが、美濃国から来た新参の刀工「兼若」です。初代甚六兼若は華やかな刃文を取 り入れ、出来栄えのすばらしさから「加賀芷宗」と呼ばれました。その作風は、同時期の加賀の刀工たちにも影響を与えています。「兼 若」は3代目の頃に最盛期を迎えますが、4代以降は下火となり、新々刀期を待たずに退転しました。

加州刀の終焉

6

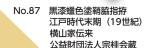
No.81 脇指 銘 [表] 加州住藤原兼重(花押)/嘉永三年于観音堂造之 [裏] 舒嘯斎大音厚義佩之 江戸時代末期 嘉永3年(1850) 個人蔵



抜き身の刀身を保護するのが拵です。江戸時代のものでは、 武士が儀式で佩角した糸巻太力拵が多く遺ります。また、個人の好みや用途に応じて、 様々な打刀拵が作られました。黒塗の鞘の大小拵は、武士が公的な場で使用するもので、加州 刀に付属した拵にもしばしば見られます。

こうした背景もあり加賀での作刀は持ち直し、明治維新を迎えるまで再び活況を呈しました。

当地には拵の土台を作る鞘師や塗師、祝巻師などの職人が多く存在しました。また、鐔や曽賞、縁、 頭、鐺、それに小柄や笄といった刀装具には、加賀藩の庇護のもとに発展した金工師の精緻な技が光り ます。加州刀に付属した拵をはじめ、工芸の粋とも言える拵の逸品を紹介します。



イベント情報

展示解説

日時:5月14日(土)・6月11日(土)

いずれも13:30~14:30 講師:5月14日/小浦 宗五郎氏 要展覧会チケット

(公益財団法人 日本美術刀剣保存協会会員) 6月11日/北 春千代氏(石川県七尾美術館館長)

会場: 当館ワークショップルーム

定員:各回40名



一般:1,000(800)円 観覧料 大学生・高校生:800(640)円 中学生以下:無料 ※()内は20名以上の団体料金 65歳以上の方は団体料金 【電子チケットの場合】

一般(65歳以上含む):800円 大学生・高校生:640円

催:石川県立歴史博物館 株式会社大塚巧藝社

特別協力:北國新聞社

力:日本美術刀剣保存協会石川県支部

株式会社ニトロプラス







98



「前田利常書状 浅野藤左衛門宛」について

◆ 学芸員 野村 将之

令和3年度夏季特別展「大加州刀展」では、90件にもおよぶ刀剣・刀装具に加え、刀工や刀剣、武術に関する文献資料を展示し、加州刀の歴史と魅力に迫った。今回、同展の再開催にあたり、刀工の活動をうかがう書状が発見されたので紹介する。

この書状は加賀藩前田家3代・利常が加賀藩士の 浅野藤左衛門に宛てたもので、利常は「金城ノ鍛 治」家忠吉兵衛が「長刀一振」を献上したことに対 し礼を述べている。浅野藤左衛門は利常に1000石 で仕え、御使番や中小将番頭、足軽頭などを歴任し ている。正保元年(1644)には小松町支配に任ぜ られ、万治2年(1659)に没した。また、書状に 出てくる「家忠吉兵衛」は陀羅尼系に属する刀工で、系図では2代にわたってその名が確認できる。その初代は慶長頃に活躍した善三郎家重の次男で、家重の系統が松戸を家名としたのに対し、洲崎を家名とした。初代家忠は明暦元年(1655)に没しており、寛永から承応年間にかけての作品が確認されている。その跡を継いだ2代家忠は寛文10年(1670)に早世したものの、洲崎氏は弟の家平の系統が代々続いて明治維新を迎えている。

この書状に関連するとみられるものとして、明治 時代の写本ではあるが「加越能刀鍛冶略伝」(金沢 市立玉川図書館蔵)に以下の記述がある。

略 略 父 略 左衛門樣御取次之由及承申候 父 享保五年正月 小松奉献上候處 院様御代五寸之小鎗 未御用相勤不申候以上 但家重善 付出差指-別家仕二付銘打改家忠与申 一郎嫡子之處 审 御書被成下則浅野藤 候其後御長刀 家忠 四郎兵衛 家忠 家忠

これは享保5年(1720)に、陀羅尼系の四郎兵衛家忠が奉行所に届け出た自らの由緒の一部で、祖父として初代家忠の事績を挙げている。そのなかには微妙院様(利常)の時代に「長刀一振」を小松へ献上したこと、この献上を藤左衛門が取り次いだことが記される。四郎兵衛家忠と2代家忠の間には年代の開きがあり、両者の関係は不明なものの、初代家忠の孫にあたる初代国平の由緒にも同様の記述があり、書状の内容と合致する。書状と由緒にある献上を同一とみるなら、書状の「家忠吉兵衛」は初代家忠であり、年代は藤左衛門が小松町支配に任ぜられた正保元年から、初代家忠が没した明暦元年の間である可能性が高い。

なお、利常が創建した小松天満宮(小松市)では 近年、承応3年(1654)8月の製作年紀を記した 初代家忠の薙刀が発見されている。書状の日付が 「卯月七日」であるため、この薙刀と書状の内容を 即座に結びつけることはできない。ただ、承応3年 頃は利常が領内の寺社に刀剣を奉納していた時期に あたるため、この書状がこうした刀剣の奉納に関わ るものである可能性は考えられよう。

加賀の刀工の足跡をたどる文献資料には番付や系

図、由緒などがあるものの、書状という形で残ることは意外に少ない。その数少ない例として『石川県史』や『加州新刀大鑑』には、江戸時代から明治時代にかけての文書が収録されるが、現在では所在が不明となっているものも少なくない。こうしたなかで今回紹介した書状は現存する貴重な資料に位置づけられる。加州刀については文献資料の他に、近年県内の寺社で刀剣の発見が続いており、引き続き新たな発見を期待したい。



前田利常書状 浅野藤左衛門宛 江戸時代前期(17世紀中頃) 個人蔵







展示をめぐるあれこれ

一令和3年度春季特別展「小原古邨 一海をこえた花鳥の世界一」を振り返って



学芸員 中村 真菜美

どうすればあらゆる来館者にとって居心地よく、 印象に残る展示ができるのか?これは学芸員共通の 悩みかもしれません。展覧会は学芸員がこの課題に 対し、自分なりの答えを示す場とも言えるでしょう。

今回は、私が担当した令和3年度春季特別展「小原古邨 ― 海をこえた花鳥の世界 ― 」の展示において、気を付けた点や反省点を振り返りたいと思います。金沢出身の絵師・小原古邨(1877-1945)は生涯を通じて、花鳥を主題とした木版多色摺の制作に携わりました。各作品は縦40cm×横20cmに収まる程度で、小さな画面に驚くほど繊細な花鳥の世界が広がっています。

当館の特別展示室・企画展示室には壁面にガラスケースがあるのですが、そのまま古邨の作品を入れてしまうと、全く細部が見えず、作品の魅力が激減してしまいます。本来は手に取ってじっくりと鑑賞するものですので、「雲母摺」や「正面摺」といった高い摺りの技術をはじめ、細部の素晴らしさが伝わらないと意味がありません。一方で、版画作品は退色を防ぐため、照度が50ルクス以下の暗い空間で展示することという制限があります。いかに作品に与える負荷を少なく、かつ「見やすい」空間を作るかが大きな課題となりました。

そこで、本展では思い切って、壁面ケースの使用を大幅に制限することとしました。会場内に仮設の壁を建てめぐらせた上で、そこに額装した古邨作品を掛け、できるだけ近づいて鑑賞できるようにしました。掛軸の一部も仮設の壁に吊るした上に、アクリルカバーを被せるといった当館では初の展示手法を試みました。低い照度でも明るく見えるように、仮設の壁の色をアイボリーにした点もポイントです。ケースを使用した箇所でも、ガラス面から作品までの距離が短くなるように、傾斜の強い台など特注の展示器具を用いました。複数の職員の目で作品の高さや距離をチェックし、修正に修正を重ねる日々…。

昨今、新型コロナウイルスへの対策として、ソーシャル・ディスタンスの重要性が唱えられていますが、 作品の間隔を詰めすぎると、自然とお客様どうしの 距離が縮まってしまいます。2m程度の対人間隔をとることが推奨されているものの、小さな古邨作品でそれに対応した間隔をとると不自然です。結局、お客様自身に気を付けていただくように館内放送をする以上の対策はとれなかったのですが、放送の音が鑑賞を妨げるとのご意見もあり、あまり効果的ではなかったと反省しています。また、体験型の展示を取り入れることができなかったことも心残りです。従来の展示はどうしても視覚に依存しがちですが、あらゆる来館者が楽しめる空間づくり、資料を体感できる場の提供も喫緊の課題となっています。お客様の安全を確保しつつ、満足度の高い展示ができるよう日々精進してまいりたいと思います。

この場をかりてお客様にお願いしたいのは、アンケートへの回答です。アンケートを通して、展示会場でお気づきになったことを学芸員にお伝えください。いよいよ4月28日からは令和4年度春季特別展「大加州刀展」もスタートします。刀の展示は照明や高さの調整が難しく、職員一同で試行錯誤している最中です。今後のためにも是非忌憚のないご意見を賜れればと思います。





展示室風景 作品の細部をいかに見せるかが課題になりました。



新収蔵の 「前田利家書状 越後中納言宛」 をめぐって

近世史料編さん室員(文化財課専門員) 久代

令和3年度に新たに博物館に寄贈された「前田利家書状 越後中納言宛」の紹介を兼ねて、本書状が出された慶 <mark>長2年(1597)の前田利家を取り巻く</mark>政治的状況について若干考察を加えてみたい<mark>。</mark>

<mark>本書状は新発見のものではなく、すでに存在が確認されていたものである。大正11年(1922)の時点では山</mark> <mark>形県米沢市の吉川金蔵氏の所蔵する42点の文書群のうちの一つであったことが、東京大学史料編纂所の撮影記録</mark> により知られる(東京大学所蔵史料目録データベース)。その後、『新潟県史 資料編 5 中世 3 』(1984年、3714 <mark>号文書)、『上越市史 別編2』(2004年、3693号文書)に翻刻が掲載され、慶長2年の利家の居所を伝える史料</mark> としても紹介された(尾下成敏「前田利家の居所と行動」)。本書状は所在不明となっていたため、原本が確認さ <mark>れ、利家との</mark>ゆかりが深い石川県に寄贈された意義は大きい。



越後中納言殿

六月九日 利家(花押) か大(加賀大納言)

預飛札、 **眼出罷下節** 節候、恐々謹言 条、萬緒期其 明隙可罷上候 付半候、軈而 能出候付て不能 至存候、如仰、 其儀候少、爰元 久々『御暇被下 以使者可申入処 存、即刻

利家、久しぶりに国元へ



国元の金沢にあった利家から伏見の上杉景勝に送られた本書状は、年号を欠くが、両者の官職や居所から慶長 2年に比定できる。内容は「私が国元に下ったことについてさっそく手紙をいただき、たいへん満足しておりま す。おっしゃるように、(秀吉から)御暇の許しが出て国元に下る際には、使者をもって申し入れるべきところ、 久々に御暇をいただき、すぐに出立したため、お伝えすることができませんでした。国元で処理すべき案件が山 積しており、申し付けが半ばです。やがて隙が明けば、上京いたしますので、いろいろなことはその時に。恐々 謹言。」というものである。利家が伏見を離れる際、使者を通じて申し入れることなく急遽帰国したことについ て、自身の国元支配の状況を伝えながら、様々な用件は上京して処理する旨を景勝に伝えている。

慶長2年は秀吉が没する前年で、国内の政治に加え、朝鮮出兵という対外的な問題も抱えていた秀吉晩年期に あたる。よって、秀吉の後継者である幼い秀頼の輔弼体制の構築も政権にとって大きな課題であった。こうした 中、徳川家康とともに豊臣政権の重鎮の一人であった利家が伏見を離れることは、円滑な政治運営のためには避 けるべき事態であり、利家自身も当然そのことは認識していただろう。しかし、利家を頼りとしていた秀吉も利 家の帰国を許しているのである。

帰国の目的

それでは、利家が豊臣政権の政治拠点であった伏見を離れてまで国元で処理すべき案件とは何だったのか。 天正14年(1586)以降、利家は国元を留守にすることが多く、前田家の一族や信頼のおける家臣に国元の支 配を任せていた。利家不在での統治に限界が生じていたため、急遽国元に帰らざるを得なかったのであろう。 利家が帰国を許されたのは5月23日のことで、同月27日には秀吉に従い参内したことが確認されることから、 上方を発ったのは翌28日以降であることが判明する。この時の帰国がかなり緊急を要するものであったことは、 利家が西笑承兌の来訪要請を断った書状の内容からもうかがえる(「西笑和尚文案」慶長2年5月23日条)。

本書状が出された6月9日前後の国元の動きをまとめた〔表〕 によれば、この頃の利家は能登の石動山衆徒や本願寺門徒(教如 派)の対応に注力している。こうした行動から、古くからの宗教 勢力や本願寺門徒に関する案件を利家自ら現地で治めることが帰 国の最大の目的であったという一つの可能性が導き出せる。利家 は8月1日には家康とともに伏見城に出仕しているので、2カ月 ほど国元に滞在し、山積した案件を処理した後、伏見に戻ったの だろう。なお、この時が利家にとって最後の帰国となった。

以上、利家を取り巻く政治的状況について若干の考察を加えてき た。本書状は豊臣政権の大老間の関係や利家の置かれていた状況を 伝える一次史料として貴重であり、検討すべき課題も多い。今回の 寄贈を機に、今後さらに研究が進展することを期待したい。

(付記) このたび貴重な史料をご寄贈くださった鮫島和子氏に、 この場をお借りして心より御礼申し上げます。

【主要参考文献】

岩沢愿彦『人物叢書 前田利家』(吉川弘文館、1966年)

尾下成敏「前田利家の居所と行動」(藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』思文閣出版、初版2011年)

稿「一六世紀末における本願寺門徒の動向一慶長二年加賀門徒誓詞の分析を中心に一」 (『石川県立歴史博物館紀要』第24号、2012年)

〔表〕 利家の国元滞在中の出来事(慶長2年)

7/9 利家、石動山天平寺の衆徒の還 住を許す

7/12 利家・利政、七尾府中蔵留守居 坊主・門徒に参下向を求める

本願寺と前田家、加賀の本願寺 7/20 門徒に本願寺准如に従う旨の誓 詞を提出させる



***本書状は企画展「れきはくコレクション2021 - 2022」** 「会期:2022年12月10日(土)~1月9日(月・祝)」にて公開予定です



展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。

※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします

5 | 「大加州刀展」閉室:5/25(水)~26(木)

14⊟ 「大加州刀展」展示解説

(土) 講師:小浦 宗五郎 氏

(公益財団法人 日本美術刀剣保存協会会員)

21⊟ れきはくゼミナール

(土) 中山

27⊟ いしかわ歴史講座

(金) 延期 6 月 休館日:6/27(月)~28(火)

11⊟ 「大加州刀展」展示解説 (+)

講師:北春千代氏 (石川県七尾美術館館長)

18⊟ れきはくゼミナール (土)

「中世霊場の一形態

- 輪島市・岩倉寺を中心に ―」 講師:岡崎 道子(当館学芸主任)

24⊟ いしかわ歴史講座 (金)

延期

「大加州刀展」展示解説

要特別展チケット・半券/当日先着順

いしかわ歴史講座

11月~1月、金曜日に実施 当館学芸員が、常設展示の内容 を中心にお話します。

受講無料 当日先着順

れきはくゼミナール

毎月1~2回、土曜日に実施。 当館の学芸員が独自のテーマを 設定し講義します。

受講無料 当日先着順 全10回

次回 展覧会の お知らせ

夏季特別展

芸教育の精華

納富介次郎とデザインの思想 -

令和4年(2022) 7/23(土)~8/28(日)

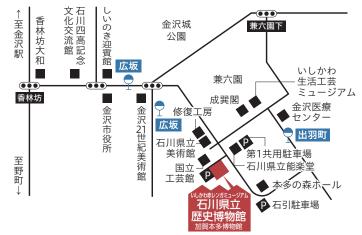
工芸作家の成長には、師である教育者の存在が重要な意味をもちます。夏季特別展で は、「工芸教育の精華 ― 納富介次郎とデザインの思想 ―」と題して、金沢工業学校初代 校長を務めた納富介次郎(号:介堂)と、納富の側近教員であった鈴木宗太郎(号:華 邨) や得田耕 (号:百禾)、友田安清 (号:九渓) らにより実践された、革新的な工芸 教育の内容を紹介します。また、納富の教育思想を受け継ぎ、現代に至るまで脈々と継 承・発展させてきた石川県ゆかりの工芸教育者たちの代表作や教育資料などもあわせて 展示します。

石川県はどのような歴史的過程を経て、今日、工芸王国と称されるまでに発展を遂げた のでしょうか。また、工芸とデザインはどのような関わり合いをもち、全国各地の工芸産 地の形成と発展に、石川県の工芸はどのような影響を与えたのでしょうか。

本展は、石川県の工芸教育の歴史を紐解くことで、工芸文化のより一層の理解を図 り、未来に向けた工芸の在り様について有意義な示唆を与えるものです。

《鷲ノ図》鈴木華邨 (個人蔵) ▶







いしかわ赤レンガミュージアム

石川県立歴史博物館

ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1 TEL:076-262-3236 FAX:076-262-1836 E-mail: rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp https://ishikawa-rekihaku.jp/



Q.「こな納豆」はプロバイオティクス食品なの? 国内最古のプロバイオティクス!? 生きて腸まで届く、芽胞状の納豆菌

「<u>納豆菌」</u>は枯草菌の一種で、稲の藁に 多く生息しています。納豆菌は増殖に適さ ない環境になったとき、生きるための手段 ない来源になったこと、主きるためが存 として耐久性の高い特殊な設<u>「芽胞(がほう)」</u>をつくります。「<mark>芽胞状の納豆菌</mark>」は熱 や乾燥に強いため、胃酸にも負けることな

く生きて腸まで届くことができます。 「約豆菌」は、善玉菌として働きながら、乳酸菌のエサ(オリゴ糖)をつくったり、乳 フリーズドライで粉末化した「こな納豆」は、納豆の良質なタンパク質や、食物繊維、カルシウム、ビタミンK₂など、納豆の有用成分を余すことなく手軽に摂取できま がらに、生きて腸まで届く「芽胞状の 菌」を、**生の納豆よりも数多く効率的** に摂ることができるのです。

■内容量:18g ■賞味期限:未開封で1年 1.080円

◆ご注文はコチラから 受付時間:9時~17時(休業日を除く)

2050-1865-3800



《オペレータに必ず「P11」とお伝えください》

●ご注文受付後、3日~7日間前後でポストにお届けします。●お支払方法は、「クレジットカード」、または「後払い(コンビニ・郵便局/手数料200円(税込)」。●送料全国 (コンヒニ・郵使) 律250円(税込)